

公共の担い手

# 子ども食堂を通じて 見えてきたこと



こがねはら子ども食堂 代表 **高橋 亮**

ここ数年、「子ども食堂」のことがマスコミなどで取り上げられることが多くなり皆さんの中にもその名前を聞いたり近くの子ども食堂に行ったことがある方もおられるかも知れない。

一方で「子どもがやってる食堂？」とか「貧しい家庭の子どもが行くところでしょ？」といった声を聞くことも事実だ。

この誌面で子ども食堂をご紹介することが、身近にいる「ちょっと気になる子」をお近くの子ども食堂に連れて来ていただくことにつながればありがたい。



昔懐かしい風景



「十分に食事がとれない子どもがいるなんていつの時代のどこの国の話だ」とにわかには信じられない気持だったが調べていくうちに小金原にも少なからず孤食や給食のない休みの日にはまともな食事を摂っていない子どもがいることが分かった。

まずは「育ち盛りの子どもたちにきちんとした食事を食べさせたい」「勉強も教えて上げたい」という思いを同じくする地域の仲間と平成28年2月「こがねはら子ども食堂」を立ち上げた。

## 1. 子ども食堂を始めたきっかけ

「給食を食べに来ていた生徒がいる」「暗くなるまで公園にいて街灯の下で勉強をしている子どもがいる」という声を聞いたのは一昨年の春頃だった。

## 2. 「子ども食堂」が広がった背景

「子ども食堂」という名前は今から5年前に大田区の「だんだんこども食堂」から始まった。

「子どもだけで来られる無料または安価の食堂」が唯一の定義という子ども食堂が瞬く間に全国に



お勉強タイム

広がったのは、当時マスコミなどで「子どもの貧困問題」が多く取り上げられるようになったことが大きく影響している。

また、「子ども食堂」というネーミングや「食事を作ってみんなで楽しく食べる」という「ハードルの低さ」が主婦を中心に全国に広がった要因と思われる。

その多くが私たちと同様、食事を十分にとれない、またいつも一人やきょうだいで食事をしている子どもたちが少なからずいることへのショックと地域のみんなで子どもたちを見守り育てようという思いから始められた。

正確な数字は分からないが全国ですでに500軒近く、千葉県内の子ども食堂で作るネットワーク「千葉県子ども食堂連絡会」参加数が約50軒、私が代表を務める松戸市内のネットワーク「まつど



宿題終わってカードゲーム

子ども食堂の会」には9軒が加入している。

私たちが始めた昨年2月の段階では県内3軒、市内では1軒だけだったことを考えると爆発的といっているほどの広がり方である。

### 3. 子どもの貧困問題

子ども食堂の広がり背景に「子どもの貧困問題」があると述べたが、この問題が広く知られるようになったキッカケは平成26年1月に施行された「子どもの貧困対策法」といえるだろう。

もちろんそれまでにもこの問題は取り上げられてきたが「日本の子どもの相対的貧困率は16.3%で6人に1人が相対的貧困状態」という数字が広まるにつけ関心が高まり、マスコミにも多く取り上げられるようになった。

ただ、子ども食堂そのものに直接の貧困対策という意味合いはなく、その多くは子どもも大人も高齢者も地域のみんなが集まり食事をしたり遊んだりする「居場所」として活動しているところがほとんどである。

その理由は貧困と結び付けられることによりつながりを必要としている子どもたちが逆に来られなくなるのではという懸念からだ。



スライム作り

## 4. こがねはら子ども食堂 よっけ塾の活動について

松戸市小金原は昭和40年代に開発された80坪～100坪の住宅とUR団地が整備された道路に立ち並ぶ緑豊かな住宅街である。

一見貧困とは無縁な佇まいだが、少子高齢化と空き家問題、貧困問題が市内でも最も進行している地区でもある。

「こがねはら子ども食堂 よっけ塾」はそんな小金原で昨年2月から始まった。居酒屋「よっけ」と隣のフリースペースを会場に毎週土曜日10時から15時まで、学習支援を柱に運営されている。

毎回調理ボランティアと学習ボランティア10名ほどが毎回参加し、子どもたちにおいしい食事作りや勉強の見守り・指導をしていただいている。

食事の準備は9時半から。子どもたちは10時ころに集まりだし、まずは宿題を開いて自主的に勉強を始める。その側には学習ボランティアが座り静かに見守っていて子どもが分からないことがあれば答えるようにしている。

私たちはこの傍らで大人が見守り分からないことがあれば優しく教えてくれて分かったら一緒に喜んでくれるという関係性を大切にしている。

このことが子どもたちに「自分は受け入れられている」という安心感や「最後までやり遂げる力」

を身につけさせてくれると考えているからだ。

ちなみによっけ塾ではいわゆる「しつけ」や強制は一切しない。もっと言えば「こんな風に導きたい」とか「こうなって欲しい」というある意味での誘導もしない、いや考えない。

なぜなら子どもたちは家庭や学校で毎日様々な規則や「しつけ」「期待」のもとにさらされている。そのすべてを否定するつもりはないが、子どもたちにとっては相当なストレスである。

子ども食堂はのびのびと安心して過ごせる居場所でありたいと思っているので、他人へよほどの迷惑となりそうなこと以外は基本的にしつけや注意はしないようにしている。

しかしよくしたものでそうすると子どもたちは自分たちで考え年長の子は年下の子の面倒をみたり、他者への気遣いを自然と身に着けていく。「子どもの持つ潜在的な力を信じるのが大切だ」とここでも実感させられる。

よっけ塾は子どもたちの自然な育ちを支える「場」なのかもしれない。

小学生は1時間もすると宿題も終わるのでボードゲームやカードゲームで遊び始める。天気の良い日は近くの公園に遊びに行く子たちもいる。

中学生は午前中いっぱいほとんど勉強している。受験生は基礎的な部分で理解していないところも多いので問題集を中心に個人指導をしている。

1期生の受験生4人は全員志望校に合格し今年3月の「送り出す会」で私は思わず涙してしまった。

12時になると待ちに待ったランチタイム。母親が働いていて給食のない日は一人で食事をしたたりお菓子で済ませる子どももいるので、みんなでにぎやかに食べる食事は見ていて本当に楽しそうだ。

食後はゲームの続きをする子、夏はプールを用意しているので水遊びをする子、終わるまで勉強する子など自由に過ごしている。



みんなでワイワイおいしそう

ときどき講師を招いて手作りのワークショップや科学遊びなどのイベントも企画している。

また、スイカ割や流しそうめん、ハロウィンやクリスマス会、餅つきなど季節ごとのイベントも実施し、家庭ではできない多様な経験を提供している。

## 5. 子ども食堂の可能性とこれから

はじめは子どもの貧困問題への止むに止まれぬ思いから始めた子ども食堂であったが、経験の中から多くのことを学んできた。

子ども食堂で子どもの貧困（家庭の貧困）をなくすことはできない。それは政治や行政の仕事であるが、そこに至る前に子ども食堂ならではの地域でできることがあると考えている。

一つ目は「孤立」の解消である。

貧困に限らず今の社会では人は簡単に「孤立」に陥る。介護、失業、病気等々。「孤立」することで必要な支援を受けたり助けを求めたりすることができず、さらなる困難に陥るケースは多い。

子ども食堂は「みんなで楽しくご飯を食べる居場所」というコンセプトであるため誰もが参加できるという敷居の低さがある。

そこで出会う年齢や性別を超えた関りは地域とのつながりを生み出し支援が必要であれば行政や専門機関につなぐこともできる。もちろんそこに来られない人とどうつながるかという課題があるのだが。

二つ目は貧困の連鎖を断つキッカケづくり。

貧困問題は子ども食堂では解決できないが、子どもたちが将来社会人として「生きていく力」を身に着けることを通じてその連鎖を少しでも断つことはできるのではないか。



栄養バランス抜群です

「生きていく力」といっても様々だが

- ①基礎的な学力と学習習慣をつけること。将来の夢を実現するためには必要。
- ②多様な大人と関わること。多様な価値観や感性、生き方に触れることは自身の将来像を描くうえで必要
- ③最後までやり続ける力。途中であきらめない力はなにをするにも必要

このような「生きていく力」を家庭で身に着けることが困難であれば地域の大人がそれを補完していく、そんな昔の横丁のような「場」としての子ども食堂であればと思う。

## 6. 最後に

私たちにはいつも励みとしている言葉がある。それは今年高校に合格した生徒の「よっけ塾に通うようになって人を信じられるようになりました」という言葉だ。

様々な環境にある子どもたちと関わる中で子どもたちのちょっとした「つぶやき」や「気配」を見逃すことなく、彼らとともに成長していきたい。